和紙の今に残る その魅力は何だろう

「和紙」、植物繊維を細く漉き上げた紙は、記録に、内装材に、あるいは衣服にと、様々な形で人類のくらしと文化に貢献している。

特に和紙は日本独自の材料を、独特の流し漉きで仕上げることで、強靭で長持ちし、しかも美しい紙を作り上げることができる。

スタッフさんの補助で「流し漉き」の技法を応用しているシーさんハニさんとリンさん（ピョウさん撮影）

和紙を知り、学ぶ

和紙は楮（こうぞ）、三椏（みつまた）、雁皮（がんぴ）によって作られている。

一般的な「和紙」の特長は「洋紙」に比べて格段に繊維が長いため、薄くとも強靭で寿命が比較的長く、独特の風合いをもつ」と言われている。

但し、種類や用途によって、一概には断言できない。木材パルプ原料から生産される「洋紙」と比較すると、原料が限られ生産性も低いため、価格は高い。

「和紙」は世界中の文化財の修復にも使われる一方、「千年以上」とも言われる優れた保存性と、強靭で柔らかな特性を活かして、日本画用紙等々、期待される用途を確立し、独特の木版画用紙、和紙の産地である。

また、日本の素材として用いられる和紙は、全国の中で千五百年と産業の歴史を持つ越前和紙の里は、多くの和紙の産地である。

越前和紙は、日本の紙幣をはじめ、様々な用途に使用されてきた。

一部、家具の部材や建具の用途にも使用される。

「和紙」と呼ばれる以前の江戸時代から、日本中で大量に生産され、寝具にも着物や衣類に代わる素材として、インテリア向けの需要が高まったり、卒業証書や免状、お習字用紙などに使用されるこれらの事ものは、天然の近年、自然に生産性に優れた保存性と、強靭で柔らかな特性を活かして、日本画用紙等々、期待される用途を確立し、独特の木版画用紙、和紙の産地です。越前和紙の技術を誇る、最高の品質という長い歴史を持つ越前和紙の産地です。

記者
シー　トウ　ワイ
ハニ
リン　イー　チュン
ピョウ　ジエニ

和紙が今まで残ってきた魅力について、「山路製紙所」山路勝海さんに聞いてみた

和紙を作る原料となるガンピの皮をほぐする山路さんとスタッフさん（シーさん撮影）

越前和紙は1500年以上の長い歴史を持っているが、どうして今でも残っているか山路製紙所の社長山路勝海さんに聞いた。

1、予想とは違うものができる

和紙の多様性は今に残る魅力の一つである。掛け軸、着物の帯、紙衣、人形、障子、襖など生活の様々なところで使われているので、和紙が今でも残っている。また、もう一つの今に残る魅力は紙の神様である。国のお札を作っているので、国が認めた紙の神様である。

2、お札こそ代表的な和紙

和紙を端的に語るに最もふさわしいものは、お札（紙幣）である。お札の特徴の一つは水や破れに強いことだ。うっかり洗濯してしまっても溶けたりしないし、何度折っても簡単に破れることはない。それは、お札が三椏（ミツマタ）やマニラ麻などの非木材繊維を原料として作られていて頑丈だからである。日本の紙幣は偽造しにくいことで世界でも評価が高いのだが、実は生活の中で最も頻繁に使われるこの「お札」にこそ、和紙の特長が生かされているのだ。

3、日本文化を支える越前和紙

紙の神様「川上御前」を祀る岡太（おかもと）神社や大瀧神社があることからも、越前で紙漉きが盛んだったことが分かる。越前和紙の特徴は、その長い歴史に裏付けされた、紙の丈夫さと、美しさにある。だからこそ、日本の歴史を変えた出来事や、絵画、文学などの文化を越前和紙は常に支えてきた。

4、日本文化は和紙と共存している

日本文化があるので、和紙もまた残っている。日本文化がないなら、和紙がいらない。和紙がない日本文化を想像しにくい。

ハニさんが作った和紙の完成品

和紙の里で紙漉きを体験してみた

和紙についてより理解するために、越前和紙漉きを体験した。越前和紙の里パピルス館では幼児から大人まで楽しく和紙漉き体験が出来る。一度に八十名の同時体験ができる大型体験設備を備え、学校の体験学習や団体旅行のプランにも対応している。スタッフの補助で、二十から四十分ほどで自作のハガキや名刺などのいろいろなお土産の紙すきが体験出来る。

まず、桁と呼ばれる道具に原料をくみ、均一になるようにすく。原料には「楮」を使い、ネリを使う「流し漉き」の技法を応用している。次は、和紙を漉いて押し花や金粉や染料などを散らして好きなパターンでデザインすることができる。その後、乾燥機で脱水をして紙から余分な水分を搾り取る。最後に、十分ほど乾燥させて世界に一つだけの越前和紙を持ち帰ることができる。

和紙を作っているハニさん、リンさん、シーさん（ピョウさん撮影）

和紙の原料の代表的なものに、「楮」・「三椏」・「雁皮」などがある。紙は繊維のあるものなら、何からでも出来るが、処理のしやすさ、出来た紙の質と使い良さから考えて、これらに優る原料はない。パピルス館の和紙づくりでは、「楮」という原料を使っている。スタッフの方は、「他の原料と比べると、繊維は太くて長く強靭なので、和紙づくり体験者にとって扱いやすい」と言った。実は、和紙を作るために、様々なステップがあるが、体験者は最後の数ステップしか体験出来なかった。

しかし、そのことからでも、体験者が和紙について少し理解できると思う。和紙に興味のある方にはおすすめだ。

和紙を作る過程「紙漉き」（ピョウさん撮影）